

当科（耳鼻咽喉科・気管食道外科）の紹介

地域に密着した基幹病院として、標準化された最新の医療を提供しつつ、多くの経験に裏打ちされた医療技術をスタッフ間で共有し、専門性の高い特殊な疾患にも広く対応しております。最先端の医療機器をいち早く導入、使いこなすことで、高齢者にもやさしい、より負担の少ない安全、確実な手術を実践しております。

耳科診療においては、昨年度保険収載された**鼓膜穿孔に対する再生医療**（鼓膜再生術）が可能となり、これまで入院手術が必要だった方も、外来での短時間の治療が可能となり、大変喜ばれております。また、進行した中耳炎や、真珠腫性中耳炎などにおいても、**最新のドリルシステムを用いた水中下内視鏡手術**（図1）によって、大部分の症例が耳の穴から手術を行うことが可能であり、痛みが少なく、真珠腫再発も少ない傾向にあります。

さらに奥、脳に近いところにある病気には、当科にて開発した**経皮的内視鏡下耳科手術**（図2）、で対応できる可能性があります。耳の後ろを大きく切る必要はありません。耳周囲の小切開（約2cmの皮膚切開）からナビゲーションシステムを用いて安全に行うことが可能になっています。

（図2：皮膚切開とナビゲーションシステム）



（図1：耳の穴から行う、水中下内視鏡手術、ロボットアーム使用）

さらに、

大きな**側頭骨手術**や**高度難聴に対する人工内耳植え込み術**、**顔面神経減荷術**、**頭頸部腫瘍手術**、**嚥下手術**、**音声再建手術**といったものについては、

自由度が高く、精密な手術が可能な**外視鏡システム**を京都では**最初に導入**（2022年4月）いたしました。外視鏡手術とは、今後顕微鏡手術から置き換わるといわれる最新のシステムで、4k3D高画質ビデオモニターに術野を展開し、内視鏡、ナビゲーションシステム、神経刺激システムなどと組み合わせることで、これまで困難とされる手術を術者の負担を減らしてより正確に行うことができます。

全国的にも有数の手術数を誇る、**内視鏡を用いた鼻科手術**および**内視鏡下耳科手術**では、いずれも京都府地域でのトップランナーとして皆様の生活の質の改善に取り組んでまいります。

さらに、医療の高度化、高齢化の影響で増加する重症嚥下障害患者に対し、嚥下サポートチームを立ち上げ、治療方針の決定から、多彩な嚥下手術の選択と施行、術後訓練まで、専門性の高い治療を積極的に行っております。手術適応の判断には多職種カンファレンスを開き、倫理的問題を含めて十分な検討を

行った後、患者中心の選択となるよう配慮しております。とくに、重症誤嚥に悩む患者様において要望の高い、当科で開発した低侵襲な嚥下機能改善型声門下喉頭閉鎖術（図2）や、低侵襲に改良した嚥下機能の改善と同時に声を残す誤嚥防止術については外視鏡を用いて精密に行います。



（図2：外視鏡による嚥下機能改善術）

頭頸部進行がんに対しては既存の合併症を考慮したうえで、拡大切除術から低侵襲手術、分子標的薬や化学療法併用放射線治療等を用いたオーダーメイドの根治治療を行っております。根治困難症例に対しても、QOLを重視した外来化学療法や緩和医療を患者目線で提案し、病診・病病連携を活用しながら行ってまいります。

副院長・部長

出島健司

出身医局：京都府立医科大学

卒業年度：昭和59年

専門分野：鼻科、アレルギー、花粉症

資格：日本耳鼻咽喉科学会専門医指導医、日本アレルギー学会指導医、日本鼻科学会認定鼻科手術暫定指導医、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会評議員、日本耳鼻咽喉科学会代議員、日本鼻科学会代議員、

部長

内田真哉

出身医局：京都府立医科大学

卒業年度：平成2年

専門分野：耳科、嚥下障害、頭頸部外科

資格：日本耳鼻咽喉科学会専門医指導医、日本耳科学会認定耳科手術暫定指導医、日本嚥下医学会認定嚥下相談医、日本臨床栄養代謝学会認定専門医、臨床倫理認定士、補聴器適合判定医

医長

森岡 繁文

出身医局：京都府立医科大学

卒業年度：平成 18 年

専門分野：耳科、めまい、頭頸部外科

資格：日本耳鼻咽喉科学会専門医指導医、補聴器相談医

医長

村上 怜

出身医局：京都府立医科大学

卒業年度：平成 19 年

専門分野：甲状腺腫瘍、頭頸部外科、鼻科

資格：日本耳鼻咽喉科学会専門医、補聴器相談医

竹村 優佳子

出身医局：京都府立医科大学

卒業年度：平成 30 年

専門分野：耳鼻咽喉科全般

資格：専攻医

野田 俊平

出身医局：京都府立医科大学

卒業年度：平成 31 年

専門分野：耳鼻咽喉科全般

資格：専攻医